

## 《はじめに》

本日は黒田人形をご覧いただき、心より御礼申し上げます。

この公演をとおして「黒田人形」を多くの方に知っていただき、関心を持っていただける方が増え、今後とも舞台に足を運んでいただけたら、また、是非に自分も演ってみたいという方が現れて加えてもらえたら。応援してもらえたら……。

この公演をきっかけに、皆様との和を結ぶことが出来れば幸いです。どうぞごゆくりご鑑賞下さい。

## 寿式三番叟

### 《あらまし》

能の「翁」は、儀式曲として一日の能組の最初に行われ、舞台を清める意味を持っていますが、これを義太夫に直し人形浄瑠璃に取り入れたものが本曲です。

各地に残る三番叟は、天下泰平、五穀豊穡を祈る儀式として伝承しており、人形浄瑠璃の成立以前からあるもの、または能を写したするなどその形態はさまざまです。

下黒田諏訪神社の明神講記録によると、天明年間中淡路の国から吉田重三郎という人形遣いが来て、黒田の人々に人形を教え、文政四年に亡くなったという記録があり、黒田の寿式三番叟はこの重三郎が伝授したといわれています。したがって、淡路の三

番叟の形をよく伝えていると高い評価を受けています。

神社の御神楽として続けてきた人形は、奉納上演の始めに舞台中央にそなえつけられ、お神酒を供え塩ばらいにより清められた後舞い始めます。笛、小鼓、口上、人形遣いの十余人程度の編成に、三味線を加えて行います。「おおさいえ、おおさいえ、喜びあり、喜びあり、この喜びを、我がこのところより、外へはやらじと思ふ」と謡いながら、一回り舞います。このあと、笛、鼓、三味線、拍子木に合わせ、鶴のえさ取りの様、笑いを取るチャリ等の舞を入れ納めます。

## 観音靈験記 沢市内より壺坂寺の段

### 《解説》

明治十六年（一八八三）十月大阪大江橋席初演。作者不詳。西国三十三所観音靈験記の内的一段。段毎に作者が異なる。明治期の作品で今日行われているものの少ない中の優作と伝わる。

夫婦愛と観音靈験を織り交ぜ観客の涙をさそうが、終りは靈験により、めでたしめでたし。

### 《あらすじ》

壺坂寺の麓に住む座頭の沢市は盲人である。その妻のお里は、まめまめしく夫を助け、家事をしながら賃

仕事に精を出して、細々と暮らしているが、沢市の心は浮かず、遂にたまり兼ねてお里を詰問する。

夫婦になつて丸三年。每晚七ツ時から先の夜中に、寢床にいた事がない、おれが盲人で、そのうえ庖癒の醜い顔が気に入らず、外に男が出来たのならさっぱりと打ち明けてくれと、詰問する。

夫の意外の一言にお里は驚いたが、それはお前の目を直さん為に、夜中に観音様へ祈願参りをしていただけだと打ち明ける。すると、沢市は盲目のひがみから貞節な妻を疑つた事を泣いて詫げる。

お里のすすめにより二人は観音様へ祈願に行く。

山頂に着いてお参りをする、沢市は、俺はこれからここで三日間断食をするから、お前は家へ帰つて片付け等をして来てくれと言う。お里は険しい山の上に盲人を一人で置いて行くのが気に掛かるが、山を下りて家へ帰る。

後に残つた沢市は、自分が居なければお里も幸福になれる、と考えて自殺を決心して、杖を巖頭に置いて巖頭から投身自殺をしてしまふ。

やがて、氣ぜわしく山頂に戻つて来たお里は、沢市が居ないので狂乱した様に探し廻り、巖頭で沢市の杖を見つけたり沢市の死骸を谷底に見つけた。

お里は歎き悲しみ、共に死のうと決心し沢市の死骸が見える谷間へ後を追ひ身投げをしてしまふ。

時は過ぎて朝明け時、空に観音様が現れて二人の正氣を取り戻してくださり、二人ともに身にかすり

傷さえ無く、その上、沢市の目が明いたのだ。二人は喜び合つて観音様の御救いだと感謝する。

### 《みどころ》

○お里が帰つた後、死を決意し、これが別れとお里にわびる沢市。

○氣も狂わんばかりに沢市を探し廻つて谷間に沢市の死骸を見つけたお里の歎き。

### 【配役】

宵祭り 本祭り

太夫 高田正男 太夫 高田正男

三味線 牧内美恵 三味線 牧内美恵

口上 中村啓一

人形遣い(担当者に変更がある場合があります)

(前段) (後段)

竹内 稔 木下憲明

井坪正和 清水謙一

木下武人 北原尚明

沢市

主

足

左

右

お里

主

足

左

右

左

右

北原 綾

北原 桃子

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

井坪 真佐美

# 生写朝顔日記宿屋より大井川の段

(高陵中学校黒田人形部の上演 本祭りのみ)

近松徳叟の生写朝顔が原作で、それが読本、歌舞伎、採等に作られた。黒田で行うものは、天保三年(一八三二)大坂竹本座で作られたもの。

## 《あらすじ》

東海道島田宿のえびすや徳右工門方に泊まった駒沢次郎左工門は、衝立の張りまぜに自分の歌があるのに不審を持ち、亭主に聞くと、中国辺の歴々の娘で尋ね人を探して苦勞するうち目を泣きつぶしあの歌を歌って袖乞いしている者とのこと。駒沢が呼んで歌を歌わせ事情を聞いてみると、秋月弓之助の娘深雪で宮城阿曾次郎(駒沢の名前)を恋い慕って探していることがわかった。

翌朝出立の時、駒沢は昨夜の女にこれを渡してくれと三品の物を徳右工門に渡した。大枝の金子と扇と目薬で、この目薬は唐伝来の秘薬で、甲子の男の生血で飲めば如何なる眼病も忽ち治るとのことだった。駒沢が出立して間もなく深雪(朝顔という)が来たので、徳右工門は三品を渡した。この扇に何か書いてありませんかと朝顔が訊く。見ると朝顔の歌があつて、宮城阿曾次郎こと駒沢次郎左工門とある。聞くより朝顔は、

知らなんだ、知らなんだ、道理で声が似ていると思つたと後を追う。

折から雷鳴り轟く大雨となったが、朝顔は止めるを聞かずに走った。大井川の端へ来ると、俄かの大水で川止めとなつてしまった。悲しみのあまり石を袂に川へ身を投げようとしているところへ、徳右工門が一人の男を連れて駆けつけ、朝顔を抱きとめる。これが秋月弓之助の下部関助で、この男から徳右工門は朝顔が秋月の娘であることを知って驚く。というのは徳右工門は元、古部三郎兵衛といい、秋月弓之助に命を助けられた者。

訳を知った徳右工門は、深雪様への御土産と言いつ己が腹へ短刀突き立てる。驚く人々に、某は甲子の男なれば、この血をもって目薬を飲めと勧め、朝顔の眼は忽ち治る。

## 《みどころ》

- 琴を弾く朝顔
- 駒沢の前で身の上話をする朝顔
- 大井川の岸に立つて嘆き悲しむ朝顔

【配 役】

前半

太夫 澁谷穂乃夏

三味線 萩本新平

後半

太夫 奥田有莉

三味線 澁谷穂乃夏

萩本新平

口上 太田隼世

人形遣い

澁谷穂乃夏

岩崎 隼

井田桃花

鋤柄陽南

高原早輝

木村友香理

萩本新平

太田隼世

北原海都

河越あかり

後藤美有

山田瑞樹

奥田有莉

鈴木真彩

平澤彩音

平栗瑠奈

平田怜蘭

櫻井百恵

玉藻前旭袂

道春館乃段

【解説】

宝暦五年（一七五五）一月 大阪豊竹座初演

《あらすじ》

右大臣道春の妻萩の方は清水坂で雌龍の鍬形を添えた捨子を拾い、桂姫と名付ける。うち、やがて実子が

生まれ、初花姫と名づけ蝶よ花よと愛育していた。悪人の薄雲王子は桂姫の美しさに心を寄せ、王子のもとに姫を差し出すようにときりに催促する。今日も家来鷲塚金藤活を使いとして、右大臣家に伝わる重宝師子王の刀を差し出すか、さなくば桂姫の首打って出せとの厳命であった。師子王の刀は何者かに盗まれて詮議中であるから暫く待つてくれと頼むが金藤活はそれなら桂姫の首を渡せと迫る。桂姫は神から授かる大事な娘で殺すことは出来ぬから妹初花姫を身代りにと哀願するが、それも聞き入れない。それでは二人に双六の勝負をさせて敗けた方の首を取ってくれと頼む。陰で立ち聞いた二人の娘は互いに勝ちを譲ろうと必死になるが、やがて桂姫の勝ちとなる。勝負は見えた、初花覚悟と金藤活の太刀は一閃。桂姫の首は落ちた。うろたえたか金藤活 たばかられたが口惜しいと萩の方は長刀とつて金藤活に斬りかかる。采女乃助も飛んで出て金藤活をしとめる。苦しい息の下で金藤活の物語るには、清水坂に娘を捨てたのも浪々の身の苦しさからした自分である。師子王の刀を盗んで来たら取り立ててやると王子に云われて盗んだのも自分である。娘の為に大恩あるお家の初花姫の御首に何で刃があてられようと前非を悔いるざんげ話。

《みどころ》

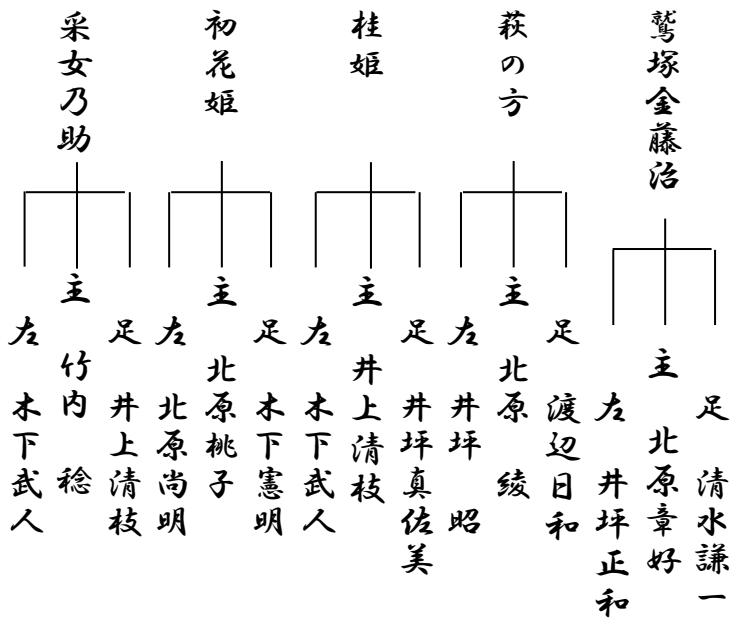
○桂姫を助けんと必死に哀願する萩の方

○互いに勝ちを譲ろうとする娘たちの様子にはらはら  
見入る萩の方

○前非を悔いて ててじやわいと娘の首に呼びかけて  
男泣きの金藤浩

【配 役】

太夫 井坪司朗  
三味線 竹内博恵  
人形遣い 柝 上 北原章好  
中村啓一



《黒田人形豆知識》

◎人形の遣い手とその役割

①「黒田人形」は、一つの人形を三人で動かす「三人遣い」です。

主遣い (しん)

左遣い (さし)

足遣い (あし)

②黒衣 (くろこ)

出遣い・・・今の文楽

黒衣・・・黒田のように黒い衣装で全身を隠します。

③人形の動き

・「て」や「かた」といって定めた動かし方があります。

・歩き方も男(たち)と女(がた)では違った決まりがあります。

④人形の遣い方

三人遣いは人形芝居の全盛期であった享保十九年に竹本座で初めて行われたと伝えられています。三人遣いは主遣い、左遣い、足遣いの三人で一人の人形を遣います。

・主遣い

主遣いは人形の衣装の背中にある穴から左手を入れて、首のしたに続く胴串を持って人形の姿勢をつくりまします。この胴串へは人形の重量の大部

分がかかってくるので、鎧武者や大きな人形の場合、支えるだけでもかなり重く大変です。

手が疲れると人形の姿勢が崩れやすくなりますが、そこをこらえて姿勢を保たなければなりません。その上で人形の上半身と頭の動き一切を左手で操り、右手は人形の衣装の右袖の中へ入れて右手を遣い、ときには、息竹という竹を握って人形が大きく肩で息をする表現もします。文字通り主遣いは三人のうちの主役となっています。

・左遣い

右手で人形の左手を操ります。この場合、主遣いや足遣いの邪魔にならないよう、左手の肘に長い棒（差し金）が付いていて、その棒を右手に持つて遣います。ちよつとしたリモートコントロールです。

・足遣い

人形のかかとの後ろに取り付けてある半月形の差し金を持って足を動かします。但し、女の人形は特別なもの以外に足はありません。この場合、足遣いは長い衣装の裾を持って足の動きを表現します。

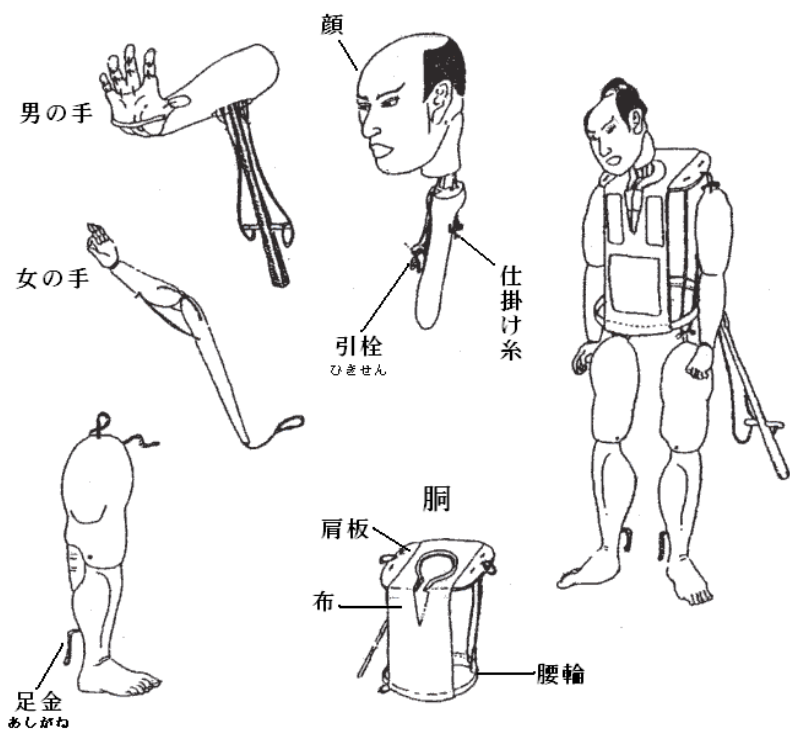
足遣いは陰の役者でありながら、実は人形を活かしていく重要な役割を担っています。このため、後によっては足遣いに一番熟練の遣い手がまわる場合もあります。

◎人形の構造と各名称

①人形の構造(一)

・頭、胴の上半身、手、足から出来ていますが、一体構造の作りになっておらず、ひもで結んであるだけです。  
・女の人形に足はなく、裾などでその様子に見せま

人形の構造図



## ②人形の構造(二)

衣装を脱いだ人形を見ると、頭と肩板と胴輪と手足だけのつくりになっています。楕円形の肩板は、肩幅と胸の厚みを出す板で、その中央の孔へ胴串を通して頭を支えます。

胴輪は竹の輪で、人形の腰の丸みをだすもの、胴は肩板と胴輪との間をつなぐ布で出来ています。

手は肩板の左右両端から麻紐でつるします。足も同様に胴輪からつるしてあります。

胴は普通のものとは裂胴といって布ですが、特殊な場合に丸胴という張子の胴も使います。

女の人形は足がなく胴輪から小さな布団をつるします。これをボンボラといい座ったときに膝の形を整える為に使います。

男の人形には肩板に細い棒が取り付けてあります。これを息所といい、人形が大きな息をするとき、この棒で肩板を突き上げて大きな息を表現します。

## 黒田人形浄瑠璃の歴史

### 《癸 祥》

黒田では元禄年間(一六八八—一七〇三)に、村にいた僧侶が「隣家の壮年に義太夫三味線人形の芸を教え、衆人集まってこれを習い、道具も追い買い求め、自然と村

中携わる様になり、産土の境内に六間に三間半の舞台を新築して、例祭に御神樂の替わりとして人形を以て興行し祭祀いたす事に同意し……」と言う明神講の文書記録があり、その頃には既に人形浄瑠璃がおこなわれていたことがわかります。

元禄年間のその後、黒田へ淡路から来た旅芸人達が、教えてくれて芸が本格的になりました。特に黒田に住み着いた芸人がいて、その人々の墓も下黒田の太念寺などにあります。

淡路では、室町時代の末期から江戸時代にかけて、浄瑠璃による現在のような人形芝居が成立しました。それ以前は首かけ式のものでした。

さらに百年程経った元禄の頃、大阪の竹本義太夫など有力太夫が多くでて、内容的にも飛躍しました。

その後、不景気や衰退もあって、淡路を本拠地にして全国へ巡業に出るようになり、巡業に出たその先で指導もして、その地域にとどまり、墓を残した人も多数あると記されています。(前述の黒田の墓もその一例)文楽は、幕末の頃、淡路出身の植村文楽軒が興したものです。

近代、淡路では市町村長が保存運動を展開し、淡路一市十町が母体になって「財団法人 淡路人形協会」を設立し、その事業の一環として「大橋鳴戸記念館」に常設の淡路人形浄瑠璃館を直営しています。

ここでは年中無休で公演しています。(座員の身分は町の職員)

## 《黒田の歴史》

- ◆ 元禄年間（一六八八〜一七〇三）に黒田の正命庵にいた正岳真海という僧侶が人形浄瑠璃を教えていた前述の明神講記録がある。（よって三百余年の歴史になる）
- ◆ 宝暦年間（一七五一〜一七六四）になって、六間×三間半の舞台を下黒田の神社境内に新築。
- ◆ その後三十年経た天明年間（一七八一〜一七八八）に、淡路から吉田重三郎が来た。氏は「道董坊伝記」をも持参し感嘆させる芸もあり、懇願されて定住し指導。（氏は文政四年（一八二一）没。黒田の太念寺に墓）
- ◆ 天保三年（一八三二）桐竹門三と吉田亀造が同じ頃に大阪から黒田へ来て定住し指導。（嘉永六年（一八五三）と安政二年（一八五五）に各々没、太念寺に墓）
- ◆ 同十年（一八三九）、築後九十年経た旧舞台取り壊し。
- ◆ 同十一年（一八四〇）、8間×4間の総二階建ての現舞台を建築。（この舞台が昭和四十九年（一九七四）、国の重要民俗資料として「重要有形民俗文化財」指定を受ける。）
- ◆ 同年十月、幕府から、市中で女浄瑠璃や人形などの見物人を集めることの禁止令が出た。
- ◆ 同十二年（一八四一）神社祭祀に芝居見世物を禁ずる条項のある「天保の改革令」がでた。
- ◆ 同十三年（一八四二）八月 黒田の人々は禁止令の下を隠れて人形による祭祀を行い、飯田藩の手入れを受け城内に引き立てられ、以後は人形禁止をきつく受けた。
- ◆ 弘化二年（一八四五）九月 黒田人形の禁が解かれ以

前にも増して盛大になった。

- ◆ 明治十年（一八七七）文楽座にいた吉田金吾が、宮田村に定住し、毎年一月には黒田に一ヶ月も滞在して教えたり、黒田人形として初めての興行を自ら座頭となって黒田人形を引き連れ、飯田の松尾町の琴水亭という寄席で十日間興行し、連日満員の盛況であった。また、浄瑠璃や人形彫刻にも優れ、彼の作になる頭が多いとのことである。

- ◆ 明治時代 まだまだ多難の道が続き、地方末端官員の頭は幕府時代と変わることなく、「百姓をする者がそんなまねごとをすると風俗を乱し稼業の農事を怠るから、決してしない様に村役人は若者を説諭せよ」と達し書きがあり、神社祭祀の上演にも許可をもらい警察へ届を出すと共に出張警察官席を設け監視の下で上演しなければならなかった。

このために、伊那谷にも数多くあった人形は明治二十年以前に殆ど滅びてしまった。

また明治三十年以降の地芝居の大流行で人形は省みられなくなったこともあった。

- ◆ 昭和二十八年（一九五三）黒田人形保存会を結成。
- ◆ 同四十九年（一九七四）、舞台が国の重要民俗資料として「重要有形民俗文化財」指定を受ける。古さ、壮さ、本格さが日本一との評。
- ◆ 同五十年（一九七五）人形が国の民俗芸能の部・無形文化財に選抜された。
- ◆ 平成十年（一九九八）黒田人形の伝承のための施設を、



下黒田神社境内隣接地に飯田市が新築した。名称「黒田人形浄瑠璃伝承館」。

このように、先人たちが度重なる危機を乗り切って今日まで永々と継承してきた礎があつて、今ここに全国にも誇り得る、この郷土文化伝統芸能「黒田人形浄瑠璃」の現在がある。